

2156

繪本寫寶袋

三

繪本寫寶袋三



法中寫家卷之三之卷目錄

源義家追安倍貞任

系正歌と射る書

為朝と義朝戦書

真田と一勇力之書

文貫義朝と書

加茂次系廣之書

三浦大介之書

宗任源和歌圖

保元兼軍之書

源賴政射越書

川津投野中撰之書

伊豆院宣之書

金子十郎之書

難波梅刺札之書

寫錦袋文二目錄

梶原二交馳之書

教澤欲捕義經書

辨於系後了書

安宅園之書

新法奈若撰之書

忠度祿省花之書

舍那王之書

堀河表付之書

時宗大儀(張)之書

源義家

頼義在川小押

をさるふとゆくと究竟

要害中た中とく落さんと難くし西に清原武則

めぐりし源中に火城のけさせく久貞任兄

さんぐよあておらけ時義家貞任とあぐけ

とあておけけさしいと義成あげいふ貞任

返と云りんと宣ひたれ貞任とのつれ

義成あつあしうと義家大善あ

と宣ひたれ貞任とる此鼻と

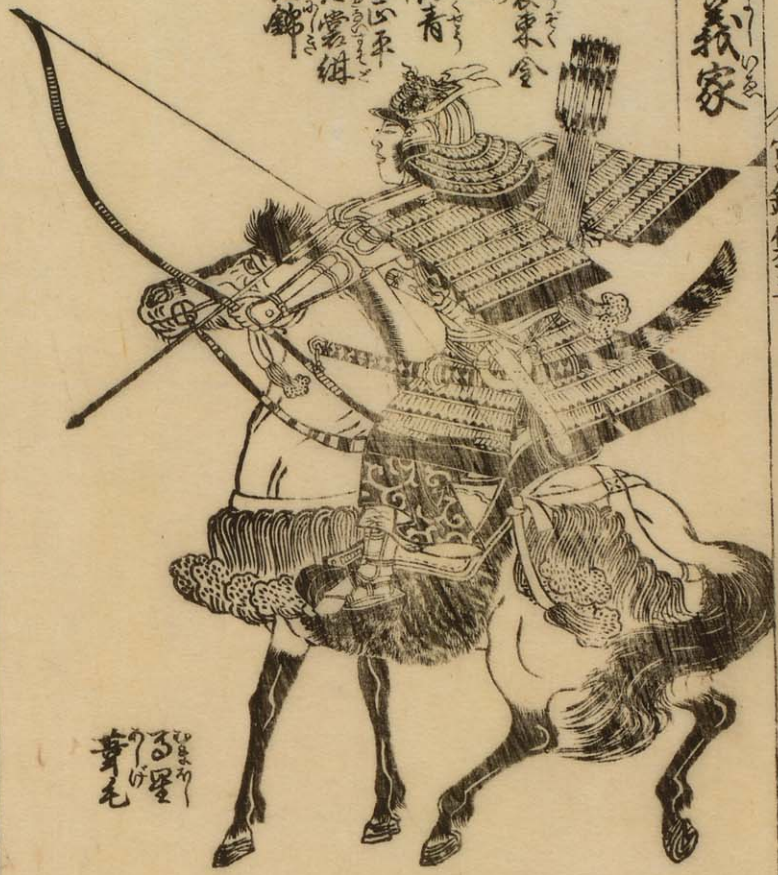
年と経く糸の礼乃物集

と付たりお色と義家

引

源義家

甲裝束全
地白
期縁青
衣返正平
襪紅裳緋
赤地錦

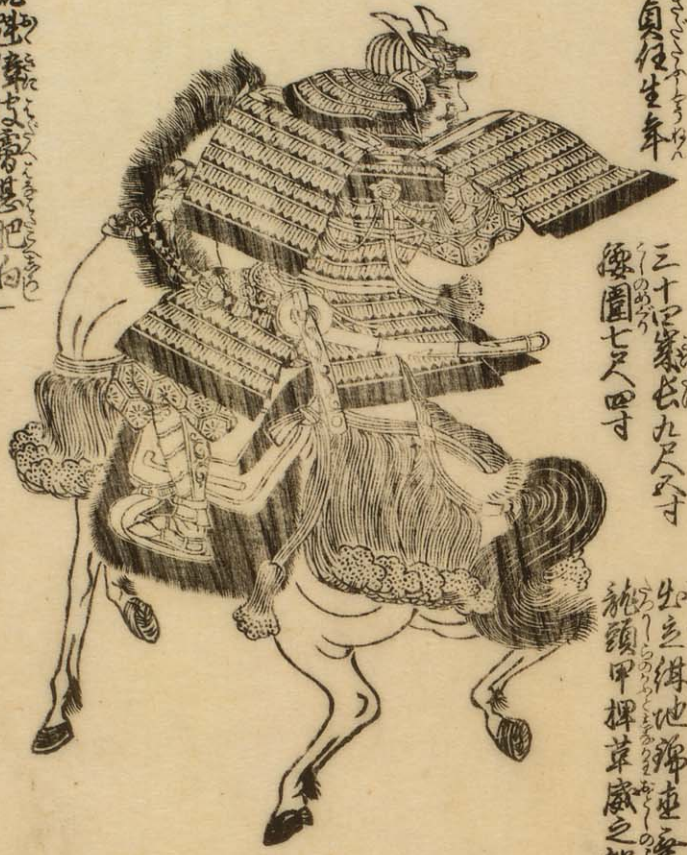


身元

安倍貞任生年

三十日 身長九尺六寸
腰圍七尺四寸

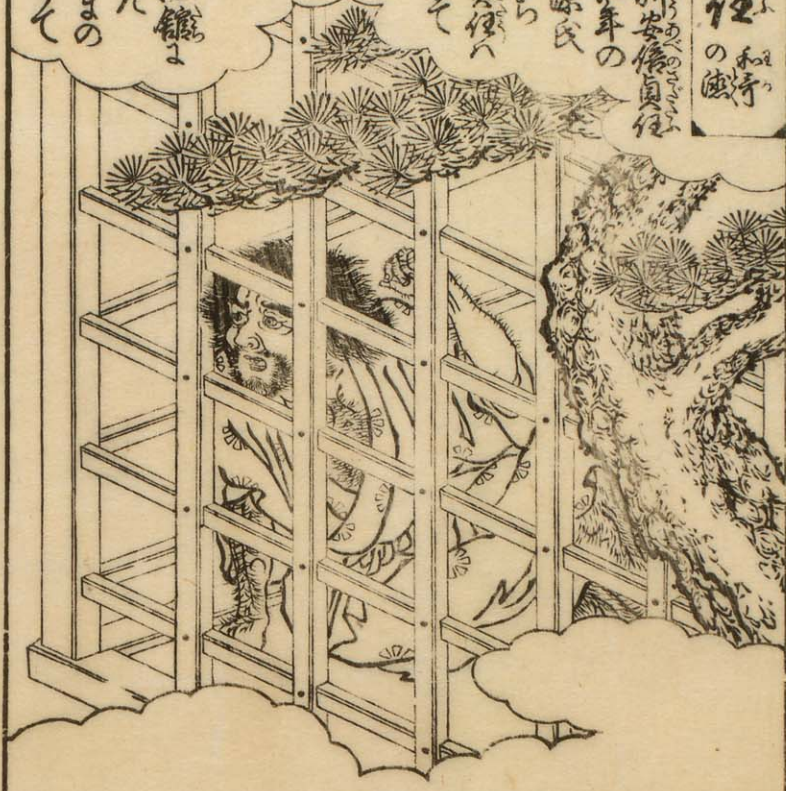
先立 緋地 錦連 至
龍頭 甲 押 草 威 之 禮



雲龍 繼 係 皮 膚 甚 肥 白
東國 一 之 壯 士 大 力 之 男 也

かうのひよぶさ
源頼朝の徳

源頼朝が奥州安房信濃
 33年信濃と九年の
 27年ひよぶ源氏
 終ふうらから
 さまひ兄貞任ハ
 せんじやう中て
 うらぬと
 甲さうと
 ひひさふハ
 りのぞくま
 海濱の後
 よりうの海濱よ
 ありとまうれ
 ぬと人あまの
 及びとあがりて



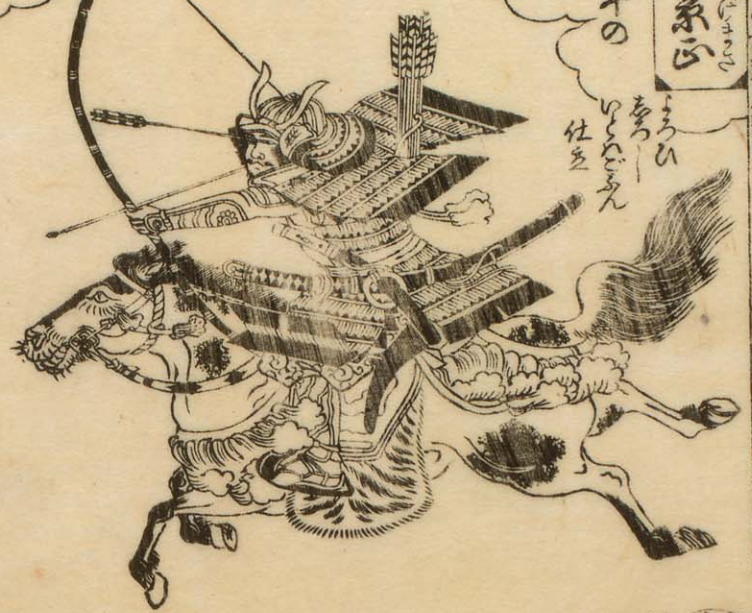
あそぶんと
 さうりや
 梅のしる
 一様にお
 あれいり
 ありー
 ありばよ
 つまて
 あづまて
 むあ乃
 とあとい
 石ころ
 大やん
 りやう
 はあ
 あく市と
 あり



丹朱仕立

強念持の部系心

先將中て後三年の
我の時義家よ
あつらひし年
十を引夫打
おろく人臣
香海部三郎
ふたの服と
甲に射付
られぬ
敵とあつた
一矢を射
こぼ
る別の者也

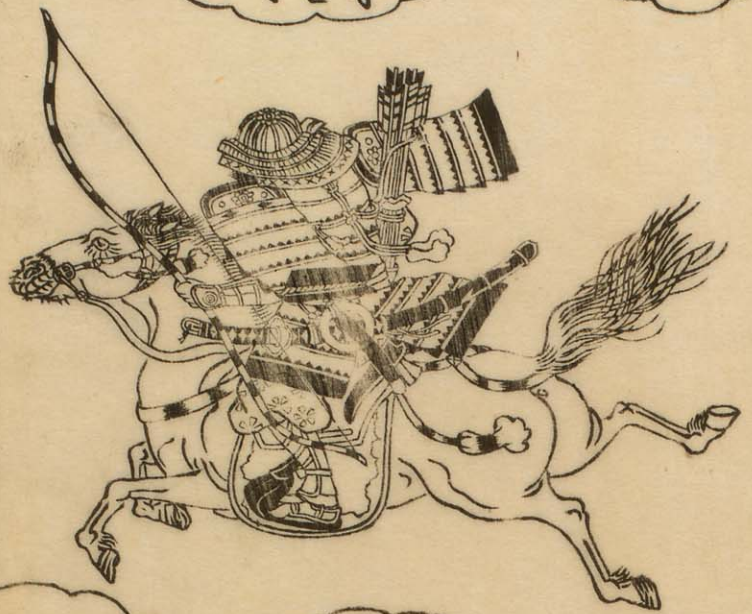


しつひ
りつひ
仕立

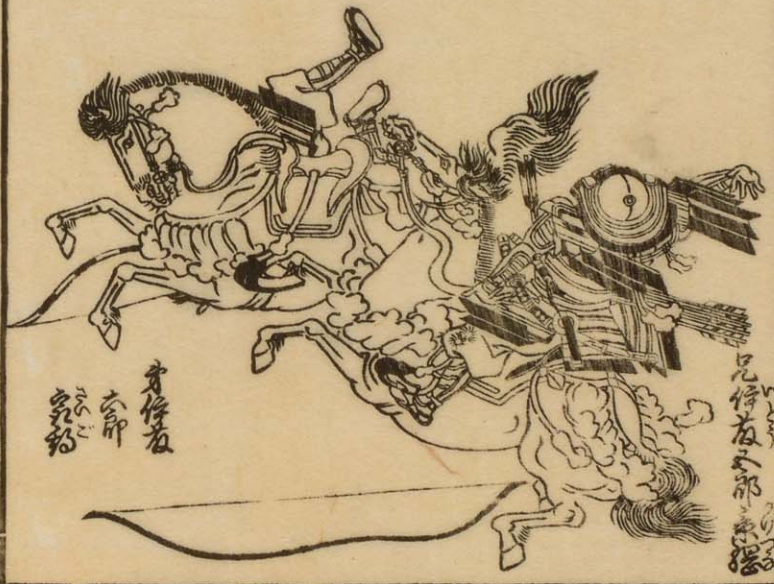
東正出立
地内よ
すれんと
おする
のこれ
印の
花乃
威乃
也 鏝

奥海部三郎

奥部の侍人あり
徳原氏衛は
あつたひを敵の
弓に世四人流ふ
十四栄神のひま
しつ射りしつ
系ひすしつ弱き
敵の夫すのせんと
引夫にかうせんと
あつたひしつ
つし系ひは
こらこれしと
あり



湯らるるの源清盛の男
 孫右衛門尉頼朝の勢の由
 穿らるる保元平家六
 兄弟あり保元平家
 高朝と平家と頼朝の
 高朝もともせは合ぬ
 ともどもおんらぶら
 ゆしなれど夫一川
 流れて見ゆと三春
 道あるは雪の尾
 ぶらに七すみ分の
 夫十又兼あを
 保元平家と頼朝
 保元平家と頼朝
 頼朝一保元平家
 保元平家と頼朝



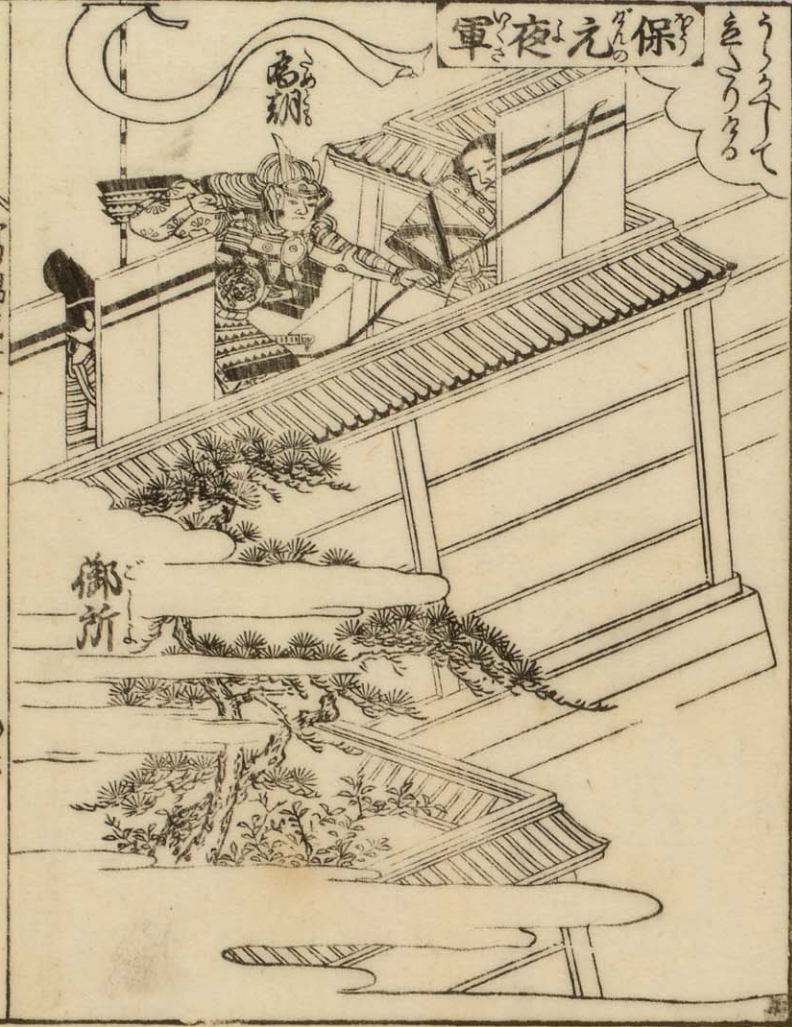
保元平家
 頼朝

兄弟あり保元平家

保元平家夜軍

うるさくして
 くるりくる

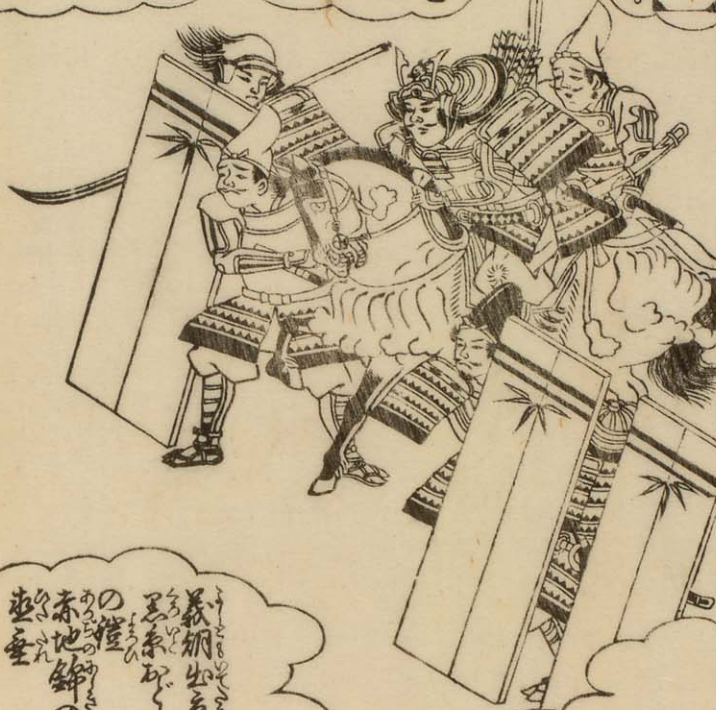
高朝



御所

源義朝

いふは源朝の
義朝と
ねびや
ありぞちんこ
まごし甲乃
星と射刺く
條の矢か
法正殿院の
乃乃方立よ
院中来て
立くる所也



源義朝
義朝出立
乃乃方立
赤地錦の
並無

源朝出立
赤地錦の
並無
義朝の八雲の
梅板は柳子と
八川合物ます
結て金物
柳子や
源朝の
紋と
柳子あり
たの
徳波の
尾輪
也



兵庫頭源頼政

越の事ハ
法人乃知
有るれを
海とる小
及良



おのこや
松早方

朱すの具
毛のさし
今

下上仕立

持山者
朱す
退ハ
虎仕
立

川津保野相撲之圖

川津三郎祐重の升菘次郎の長子
去肥次郎が婿あり俵豆五拍が婿あり
すまふの時保野からす向ふまで川津とあ合二番まのりさ也

肉を朱のさめあてんま
下着のせうもや
金さしゆせんや
ごんあんトウ入



石岡文下筆朱合大級

文覚荒行之巻

け法師信名遠敷盛重と云性憤り強く
十八歳中つつかし法主と曰り熊野那智の修し七日の修し教
しとふれなるげは極月廿日余り新君指と理三郎の白糸なる
ひとあれりさきととたさづ不入てうこれなり二三日あ其
身其本のとくあふとでに親えなる時あんがうせいでる来り
文覚とすくひものり是の勢力をくして尾の神護寺と述
立せんと院の御所へまんだん様とさげし我平家文覚とさ
く俵豆の屋へあがりあつたいとさゆりあつてつかして平家
やちけし神護寺と立立るなりとさづりたりそは源の頼朝へ
平治の軍にうらまけ先を俵豆に流されかりたる文覚あり
まじむらんすすむいこいどをわくうけつてあつた義綱の
船體と見せまのすれお像はむせむ居る我勅勤の身あれはあ
甲斐はあ今平家退付の院重とさふんさるは船と振るごと
船も小文覚実義共とさふたすの我のそち小院重と後てまのり
せんと花がかにあはるる流重と婿つりて頼朝小そ後りたる

制多加童子



父の赤

糸

髪

寫錦袋三

〇十一

粉鴉羅童子



髪

髪

寫錦袋三

〇十

伊豆の院宣

伊豆の院宣いずのいんせんとあり

小糸時政こいとときまさがさしひ

先任豆の目まゐりまめ

代衆判皮しろあし

敷きと敷付ぬきつけは

せんせんと小糸承り

お務おむゆるゆるのの央あとの

分ぶんべべ判はん皮ひああすすん

使つかひひあるあるせんせんと

すすてて向むかひひののり

されされととも

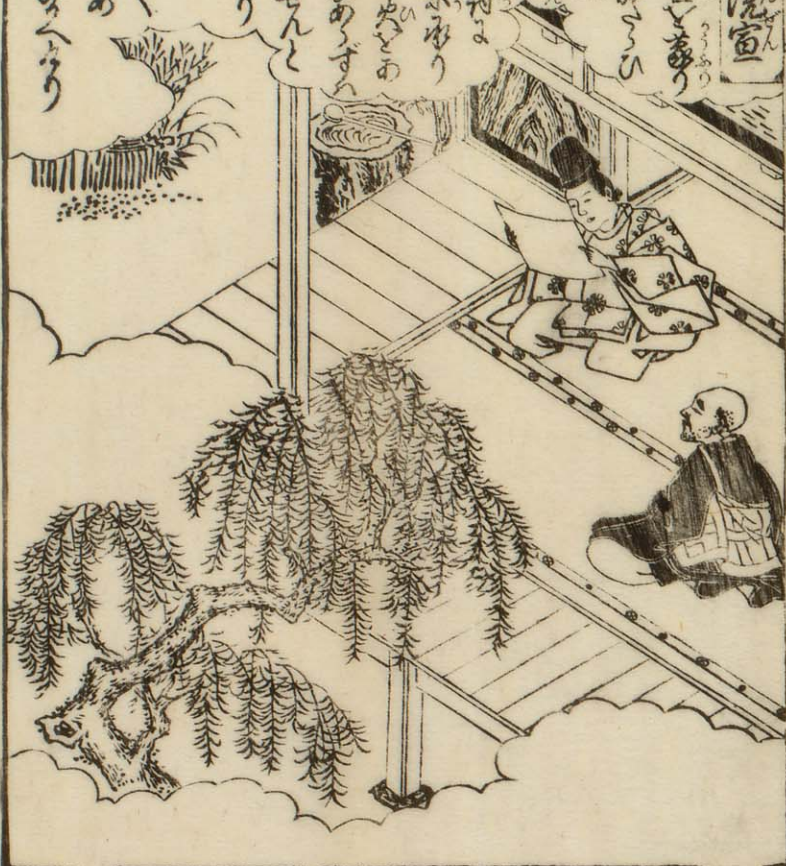
ややううののいいく

おお像ぞうももせせあ

ちちんんででひひくくり

ちちんんででひひくくり

ちちんんででひひくくり



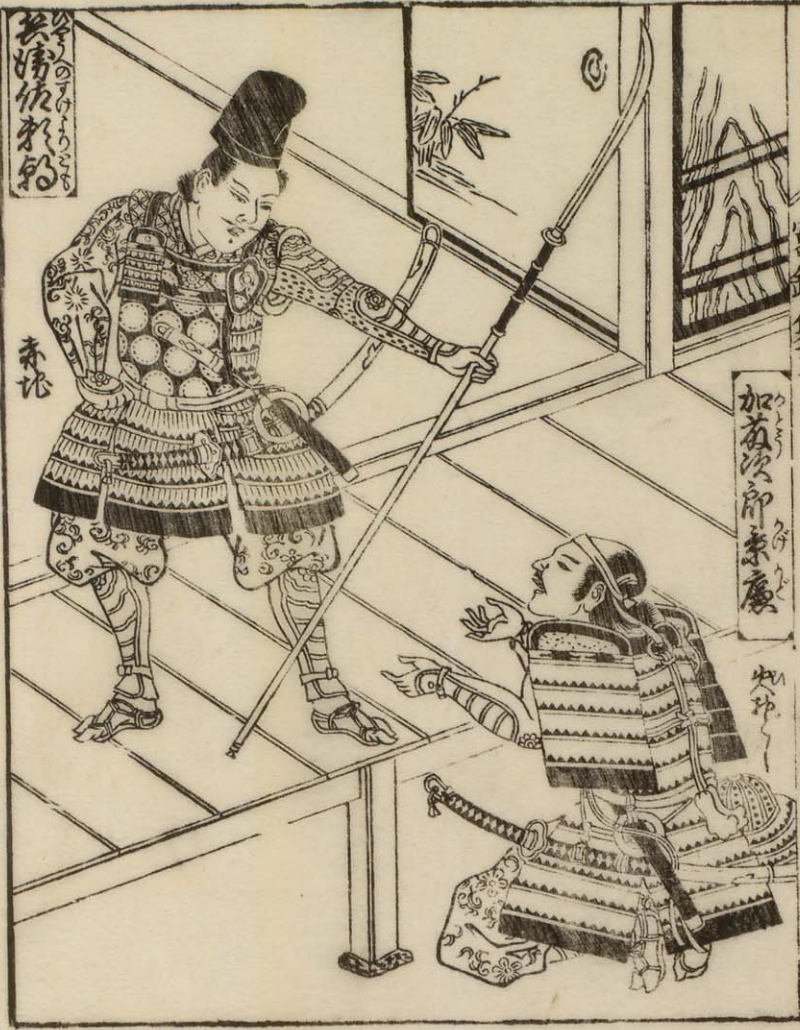
加茂次郎兼廣かものじらうかねひろのゆんささううりは及びきじふりぬ色
 とて心ざらじられど何事かあ申んとは兼廣のらる巻をひき
 作取へてせよの頼の小具足に小長刀つとあんよつ立給へが
 かげりと刀を仕ぬの今頼のその判發と討んと小兼作の本と
 つつうぬ打からささむ敵に決成くすこ云つうがはさささあり
 も足へど兼廣ありとのこまふ兼とゆり兼討たれりそ
 とて兼廣とらじくけあつ成りけりどあがりそ兼とりの燈
 白星の甲とび兼討たれりかより柄の長さおろくへりと
 つたたまふ小長刀決をけりたり兼とりの死向ひ小兼り
 對面と討取んて仕ぬんのゆんささうのさありとのいむかげり
 されどあまらにたれてうらむらう首つぬのそまのそととい兼
 刀とけりりそとせりり小兼とるとあぐら城甲に事
 ありせぬ入の橋小兼けりけりけの小か給つとさうらさりなる也
 を後土肥去倉屋橋三百余騎よする橋山は兼とり又安房と
 後（後）の千餘人味方して終は兼とらむらほりまふ

寫錦代衣三

〇十二

加茂次郎兼廣

兼作



兼作のすけりり

赤地

金子十郎家忠

三浦一黨夜笠の城は終つて

とれ金子と島山を同ゆして

よせり大介金子がうらまへ

人よすまきし彼んど

城申ふりひさびさ

酒と入て悪どりせ

物々り家忠をよ丸

三夜りして一礼して

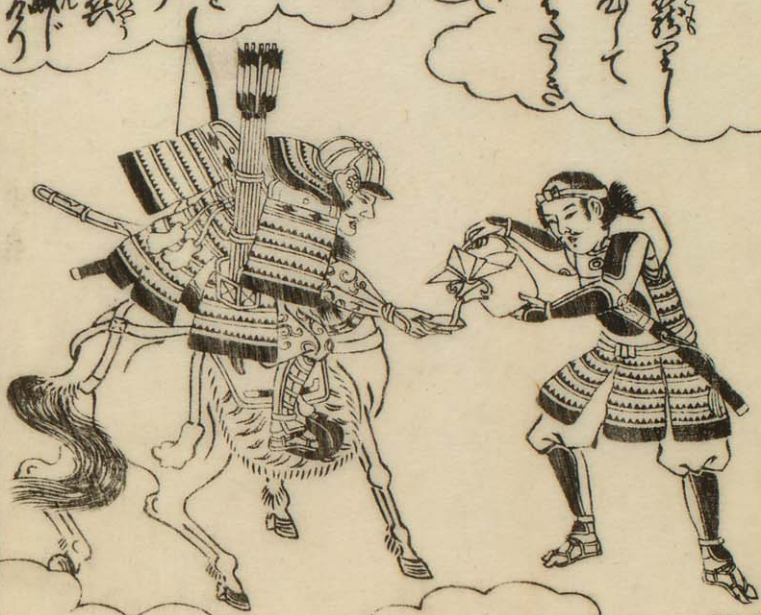
千々りの軍陣は酒と

修久法也修久礼あり

大介があらるといひ家忠兵

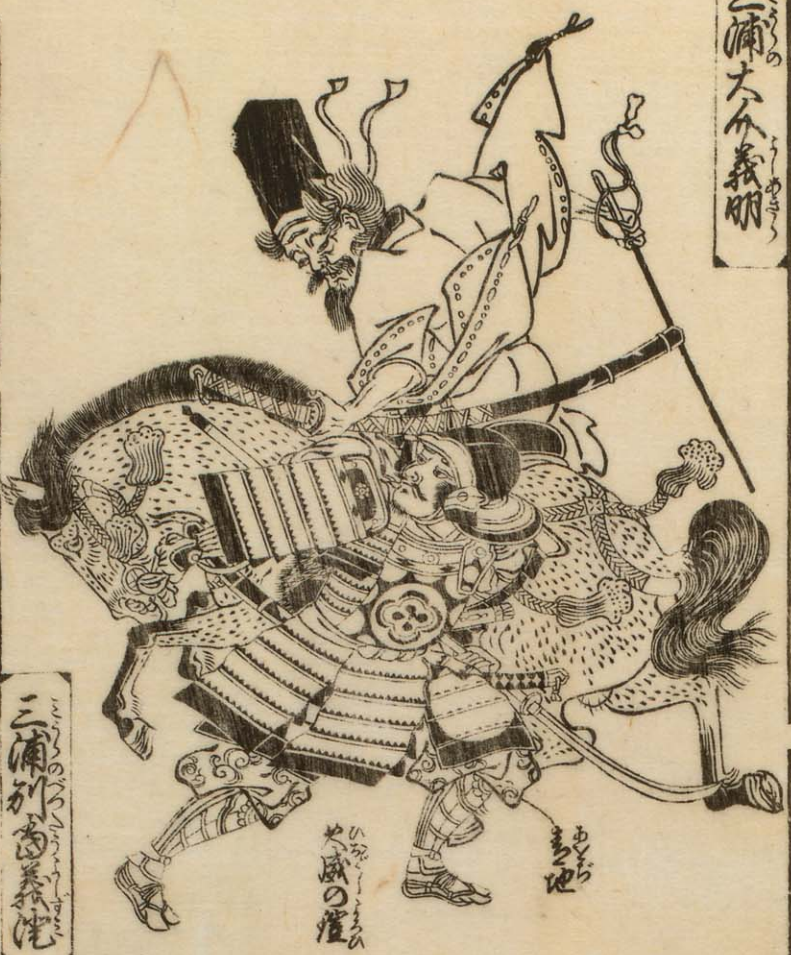
法の礼とあまうとく令願

たり



三浦大外義明 二浦の一統に於ては、力と合せんと二百余騎
 中、出々海が於て船石格乃軍に於ては、終ひの方と成り
 中、一々一々海乃中て、島山重忠、六百餘騎、は、河邊の
 平の浦中て、さかひ島山敷軍、一を、後又大勢中て、夜並の
 味、よと、一を、夷、さく、ふ、大外、味、方、れ、子、よ、と、見、我、は、十三
 より、己、軍、さ、あ、な、て、と、年、七、千、九、條、た、く、と、て、亦、若、者、若
 兵、發、せ、り、は、軍、に、あ、ら、う、老、後、の、面、目、が、り、義、明、定、船、の、い、く、さ
 しく、と、せん、と、向、さ、ひ、これ、の、袖、せ、ら、れ、よ、り、と、あ、り、引、立、く
 を、か、い、り、腰、は、付、る、は、う、ら、の、り、た、れ、も、小、策、と、ぬ、と、い、れ、た、し
 ぶ、あ、う、い、ら、う、既、お、出、ん、と、く、と、子、良、の、別、當、義、澄、父、が、身
 を、い、と、刀、で、る、の、は、お、さ、り、つ、と、一、紙、そ、の、け、と、策、お、て、う、て
 ど、も、甲、か、れ、だ、い、る、ま、だ、強、は、城、中、へ、引、入、り、あ、れ、大、外、法
 率、に、と、び、と、付、つ、と、謀、あり

三浦大外義明



大威の燈

あまの地

三浦大外義明

難波津乃梅 源義隆侍の空に梅を挿して年より梅は
 見給ひたれと云て尋ねし小仁徳の空の御時いれ給ひ給
 としに梅ありし申されぬゆへく人の好むらんやと云ひ
 無念と云て制れと云てかゝぬえられしなり

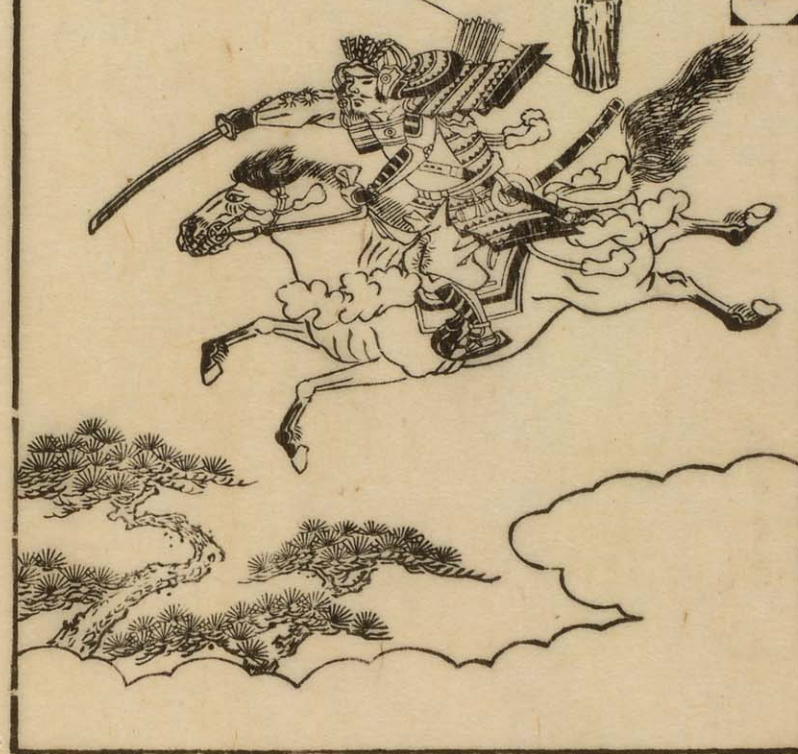


制れと云

この... 南... 也... 折... 枝... 盗... 奪... 志...
 任... 永... 紅... 葉... 之... 例... 儀... 一... 枝... 去... 下... 奪... 一... 指...

梶原二度の廻

生田の森ハ
 平家十萬金勢
 乃大子ありしハ
 梶原源之丞幸
 磨る樹花一
 枝も折て
 服よじ
 出之
 とやう
 あり六
 あつこれ故よ
 返せんとて



筋とあられ甲を
 うらふさ大
 戦ひしと
 父平二
 素時
 返
 本
 大勢
 おり
 源をた
 雲の蔭
 取りたる



源をた
 雲の蔭
 取りたる

旗本

以書て本は下法と書とせは
花やと骨をあらふは忠度



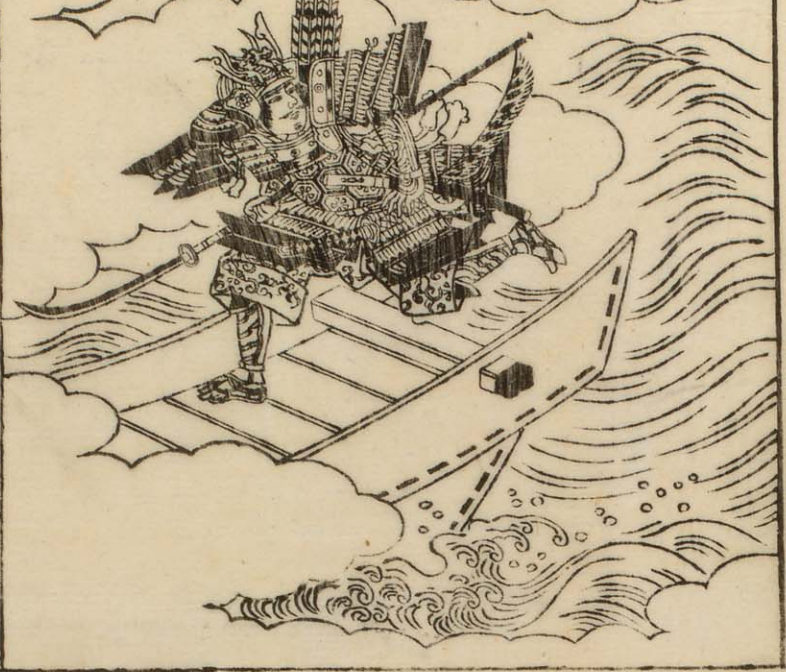
源登守平教経

源登守平教経
 唐倭威の
 禮光ハ
 唐錦の
 赤地錦の
 赤雲
 字紋禮の
 金物等ハ
 十六の
 繋あり



源判官義経

源判官義経
 義経も立赤水錦の
 座空家雲海の禮
 け号依宅及判官の
 船小乗あり判官の
 ぬひ飛でから
 義経がかつとと
 ありぬん
 西方の舟の
 る二天むらりのと
 ころなるに中を
 飛うつるまよ
 勢ハかり



合那王の事

宗平牛の源の義朝の八男
 而も、頼朝の山内信房より
 買入せしむ一兵衛の
 奥侍と傳へしといはる
 と云ふ



宗平牛の源の義朝の八男
 而も、頼朝の山内信房より
 買入せしむ一兵衛の
 奥侍と傳へしといはる
 と云ふ

二階堂去依存正順

船長はつらつら一人ひとを
 去依の當へら入を
 らうぞ、七十八人
 去依の傳へしといはる
 と云ふ



とがのこまひんわうのき
富樫たか門安宅岡

たは門利友
あま
めん
たれ
ざと
年あ
ら
かん
一
ま
あ
め
り

